

高教組第100回中央委員会

高教組委員長 竹島久美

二月三日、高教組第一〇〇回中央委員会であった。中央委員会が年一回になって久しいので、「高教組が出来て一〇〇年か？」と疑問に思う中央委員がいるかも知って説明しましたが、出席者の年齢層が高く、誤解の心配は少なそうでした。

出された意見や現状の中からいくつか紹介します。

・改憲について、発議される前に止めないといけない。棄権はできない。三〇〇〇万署名を。

・退職手当減額について（また、減らされました）

・パソコンを使った校務支援システム（各自が成績や出席、生徒情報などを入力し、それが成績一覧表や指導要録、調査書など、もろもろの書類に繋がる県立高校に導入された統一のシステム）の不具合や教育現場に合っていない点が多く、県教委や業者に言っても対応が遅かったり、できなかったりする。

・新一年生が受験する時から変更になる調査書（入学時から生徒のいろいろな履歴を残していく必要がある）に対応するため、民間（ベネッセ）のアプリ「クラッシュ」を導入するが、個人情報を保護の観点からも問題ではないか。

・初任研で若い人ががらんじがらめ。教研活動を大切に。

・二月十一日、中四九ブロック障害児学校・学級学習交流会を高知で開催

・高校生のアルバイトの実態、ボランティアなど

・子ども食堂、子どもの貧困など

・北朝鮮のミサイル発射にかかわる通知や避難訓練について

この原稿を書きながら高知新聞夕刊を開くと、県が二〇一八年度予算案を発表した。この記事が載っていました。

「教育の充実と子育て支援」の項の最初に、「県教委高等学校課に新設する『学校支援チーム』に七三三一万円を措置。授業改善などに取り組み、基礎学力向上を図る」とありました。指導主事や元校長などのチームのようですが、「もったいない、他に使うところがあるだろう」と思います。これだ、忙しいのが増え、学校の自主性は削られる。

ます。「ちがうだろう」と言いたいことは、日々たくさん。さて、一〇年後、二〇年後はどんな議論がされているのでしょうか。

平和主義とは何か？ 署名の力！

別役 美佐

「建国記念の日」に反対し日本のいまと明日を考える集いⅡが、2月11日、人権啓発センターで開催されました。前半は、青木宏治氏（高知大学名誉教授）から、「憲法の平和主義を『修正』し、壊す安倍自民党の改憲」と題した講演がありました。「憲法9条の『立法事実』としては、第二次世界大戦の悲惨な戦争への反省がある。国連憲章、ポツダム宣言、広島、長崎の原爆投下などをふまえて9条は選り取られた。それを、安倍政権は、『押し付け』という意図をもっている。だから、『修正』したい」という意識に向かう姿勢は、安倍政権の改憲に向かう姿勢は、日本国憲法が選んだ平和主義とは何か、もう一度つかむ必要がある。」と訴えました。

後半は、運動の進め方や3000万署名への取り組みについて報告がありました。憲法のミ二冊子の活用（新日本婦人会）、統一したスカイプでアピールをする団体（一票で変える土佐の女たち会）、地域の4000世帯に憲法9条の新聞を配布する高知市福井支部の活動、党を超えて月に一度のサイレント宣伝を実施し、多動している状況（須崎市）等が報告されました。300万の署名を集約することは、左右へウイングを広げ、運動や署名活動に大衆性をもたせることの大切さが再度確認されました。

今回の2・11集会は、建国記念の日に対する本来の趣旨がありつつも、3000万署名への一斉スタートの会として位置づけられた会でした。なお、参加者は、160名でした。

いまだから伝えたい言葉がある 竹本源治の詩 「戦死せる教え子よ」の曲を披露する会

別役美佐

2月17日（土）音と詩が、五線譜から飛びたち、会場を埋めつくした人々の心に沈黙と祈りの音符を刻み始めました。いまだから伝えたい言葉がある。竹本源治の詩「戦死せる教え子よ」の曲を披露する会。の会場となった高知城ホール。4Fです。教え子を戦場に送ってしまった悔恨、苦悩から生まれたこの詩は、「教え子を再び戦場に送らない」という強い信念で、教職員を一致団結へと向かわせ、平和教育、民主教育運動の礎となり、これまで多くの教職員を見守ってきました。今回、この「詩」に、長年、音楽教育の携わってこられた鍋島博直先生が、曲をつけられ、さらに、「詩」の精神を後世に残していくという主旨で計画された会でした。曲の披露の前には、川村高子さん（退婦教）から、「私達が、忘れないように、竹本先生の詩を身近に引き寄せて下さった。教師を引き寄せた男も女も、心一つにして願いを込めて活動してきた。死ぬまで、この心を持ち続けることが私の生きがいで、九十九歳とは思えない力強い声で開会の言葉を述べられました。続いて、叶岡淑子さんの朗読で、「詩」の行間に息が吹き込まれ、会場はまさにその時を待ちました。舞台上には、森木郁子さんを始め、練習を重ねられた合唱団の方々が上がられ、見事な歌声を披露してくださいました。作曲者の鍋島先生は、「この詩をそのままにしておくと、人の目にも触れなくなっていく。節をつけ、世に広めていく。詩、作者の命が引き継がれていくと思う。昨年、末、墓参（池川町用居）を行った。山々に奉納させていた。140名を越す聴衆が、つめかけました。参加者からは、「現



戦死せる教え子よ 竹本源治

場まで広げていきたい」との声とともに、「初めて大学時代にこの詩に触れ、衝撃を受けた。9条を守る運動を頑張りたい。」など、感想が述べられました。会の最後には、参加者全員で、声を響かせ合い、曲の誕生を祝いあいました。今後は、世代を超えて、歌い継がれていくことを願っています。



嗚呼！

「お互いにだまされていた」の言訳がなんでできよう

慚愧悔恨懺悔を重ねてもそれがなんの償いになるう

逝った君はもう還らない

今ぞ私は汚濁の手をすすぎ涙をばらって

君の墓標に響く

「繰り返さぬぞ絶対！」

（一九五二年一月三十日高知教組「るねさんす」44号に掲載）

